

駅、ソ連軍司令部に相当額の金を使い特別列車を出して貰う。本線は通れないので黄海線廻りである。田舎駅鶴見で下車、鉄道警備隊、治安署、国境警備隊に調べられる。その都度袖の下である。鮮人の道案内人を雇い荷物を運ぶ牛車も雇い二十八度線の手前山道を進む。途中何度も牛車曳きが止まっては値上げの交渉が始まる。人の足元を見て山賊共と思うが栓なし。朝鮮では葬式の時墓場まで行くのに棺を担いだ大勢の人足が途中何度も棺を下ろして動かない。その度に酒を吞ませ景気をつけては進む風習がある。明け方三十八度線と書いた掲示板を見る。青丹駅に着いたのである。解放されたような気分になる。ここから無蓋貨車で開城に到着、ここからお世話をしてくれるのは日本人会の人達であった。

頭からDDTを浴びて京城南山の寺に収容された。夕食はコーリヤンの水煮をブリキ缶のコップ半分、食欲は出ない。鮮人が色々の食物を売りに来る。本町通りに出してみるとパン屋にふかふかの焼きたてがある。値段は非常に高く物価は一般的に北鮮より高い。翌日竜山駅より貨車に乗り釜山着、途中至るところ李承晩博士万歳の宣

伝であった。

引揚船はリバー艦で士官室に一家八人入れたのはよかった。食事は大豆の水煮だけ、ボーイの話では一皿五十円で米飯福神漬付もある由、サイドワークにやっているとのことであった。五月二十五日仙崎港に到着。

日本に帰ってからもっと大変だった。食料は不足、売る物もない。信用も何もない。

またあとになったが京城の収容所で逢った南山の寺で這って動いている人がいた。母親を背負って三十八度線を越えるまで歩き続け遂に立てなくなったとのことであった。我が一家にも祖母がいたのであるが丈夫であったので幸いであった。多くの難民の中でも私達は比較的に引揚げた方と感謝しています。

我が家の運命を変えた戦争

北海道 谷 口 雅 枝

私達一家がサラリーマンだった父の任地、朝鮮平安北

道新義州に着いたのは昭和十四年だった。そのバルブ工場
の杜宅は当時には珍しい便所、浴室に至るまで全室暖
房完備の家だった。現地の方も親切で、初めて食べた自
家製の朝鮮漬けの味は、現在市販されているものとは格
段の差のように思う。

この地で父と同じ会社勤務の夫と縁があつて結ばれ、
長男誕生は昭和十六年だった。その同じ年の十二月には
満州奉天省宮口市に移転した。妹の新しい職がまきり、
出勤第一日が、くしくも長い戦争勃発の朝だったことは
忘れられない。以後、ラジオは勿論あらゆる報道には関
心をもっていたが、戦況はいつも勝利であり、国民を欺
いた発表とは、つゆほども知らず挙国一致の精神で何事
も我慢の日々は当然と、国を信じていたものだ。

十七年には名古屋で勉学中の弟が入隊することにな
り、両親のいる満州まで報告に来た。この日が親子永遠
の別れとは予想だにせずシンガポール陥落の大騒ぎの中
に日の丸の旗をふって見送る私達、手を振って去って
いった弟の姿が今も目のおくに浮かんでくる。

昭和十八年、二男誕生は平壤の西方鎮南浦という港町

だ。孫が増えた喜びの父に今度は資源開発事業調査のた
めビルマへ出向を命じられる。日本のために老いの身捧
げなむとて同僚とともに戦況の激しくなりつつある地へ
出発した。翌十九年に、弟は航空兵として父のいるビル
マに転戦したが戦死。それを知らずに父もまた、病いに
倒れ二十年六月異郷にて他界する。留守家族がこのこと
を知らされたのは二十一年十月、同社の方が帰国され、
父の遺骨を胸に訪ねて下さり最後の様子を聞かされたが
ただ無念でたまらなかつた。

二十年八月の暑い日、在郷軍人の夫が召集となり、そ
して終戦、消息不明となっていたが、三年後ソ連に抑留
されていたことがわかる。

その年の十一月に二人目出産予定の私は二人の子を背
負つての引揚げとなる。これがどんな苦しみかは大同小
異の話なので省略する。これより前の十八年に札幌に帰
国していた母のもとにたどりつき体面したときの涙、生
きている喜びと運の強さを痛感したものだ。やっと借家
をみつけたが外便所で畳なし、家主は物資不足で修理で
きかないという。床に蓆を敷いた、雨が降れば雨漏り、親

子が肩をよせ合って隅の方にいる。秋の夜など柵屋根の透間からもれる月を眺めたこともある。六畳二間に六人が二年間過ごした。母や妹の衣類はほとんどん食料品にと変わっていく。無事三男を出産したものの、一升の牛乳を求めて、郊外まで酪農家を捜して歩く。この道のりは産後の体とわら靴をはいての雪道、空腹の身にはとてもつらく、悲しい思いをしたものだ。

相変わらず買い出しの日のことである。背の荷の重さに頭もあげられず一步をやっと踏み出す私達の姿をみてあわれを感じたのか、馬車に乗せて下さる方があり救われた。話をすると北朝鮮出身者とわかる。

その地方を知っている私達は話題も通じ合よく遊びにみえていたものだ。そのうち故郷に帰国ということになり便りを約束して別れたが今となっては遠い国となり音信はない。四十年以上たったわけだが無事に過ごされているか気にかかる恩人のひとりになっている。

従姉もまた北朝鮮の引揚者だ、税関吏だった出征中に終戦。消息不明になった夫を心配しながら同邦人とともに逃避行となる。

昼は草むらに隠れ、夜になると姑や幼子の手を引いてひたすら南下し、やっと小さな漁船に助けられ裸同然で帰国した。偶然だが同じ頃夫も帰還できたが再会の喜びもつかの間、栄養失調の夫は療養生活に入ったが再起することができず死亡となる。当時四歳だった幼子は昼間の出歩きを恐がり、夜もまたかすかな気配にも敏感で笑顔を忘れ、母親の悩みが続いたがやっと十年ぐらいで全快した。

私が外地で暮らしたのは満州が四年、朝鮮で三年の七年間だがこの年数は軍国主義に翻弄されていたのではないか、一億一心は何だったのか。死ぬ思いの帰国も年寄りと女、子供だけの暮らしは筆舌に表されないものだ。

私の一家はあの戦争によって百八十度に運命を変えられたのだ。時折り家系図を聞くが、国の犠牲となって戦死抹消された者の多いこと、故人の痛恨のことばが聞こえてくるようだ。訴えどころのない悔しい胸はいつもいたむ。この我が身もやがて露と消えるだろう。過去の歴史の中にあつた悲しい戦争、それが如何にむなしい年月であつたかをよく熟知してもらい、これからはおだやか

な御代をつくるためだけの努力をする人間になってほしいとの願いで、あえて書き記した。

北朝鮮の回想

北海道 内 藤 美 雪

永い歲月やっと国交回復に向く昨今、終戦当時十五歳の私も今は六十歳還暦を迎えました。

私共一家は興南市に住み、日本窒素肥料株式会社に父が働いており、昭和三年叔父を頼りに朝鮮に渡り、九人の家族を支えておりました。

十二年頃国を挙げての勝ち祝い、旗行列、夜は提燈行列、幼い私は手を引かれて歩いたものです。

十六年私は私鉄で働き、初任給六十円をもらった覚えがあります。だんだん戦争は不利となり、毎日大本営発表のニュースをくい入る様に聞いたものです。

そのうち長兄が海軍志願、すぐ次兄が予科練志願後に、父四十三歳で応召、残された母と六人の不安な生活、

終戦を迎え、九月十五日突然朝鮮の保安官の監視で三週間後の立退命令が出て朝鮮人の社宅と交換させられた。

着のみ着のまま取敢えず鍋・やかん等を持って二度と戻ることの出来ない家を捨て、家財道具は持ち出すこと禁じられ、苦境に立たせられた日本人、ソ連人と合部屋二世帯の生活が始まった。食事は塩サンマ一匹に大豆や高粱を煮込んだ雑炊を食べたものです。

十月十二日頃の間北朝鮮の日本の兵隊さんが、毎日何万人何千人とぞくぞく集結し、家の近くの道を通って興南港からシベリヤ方面に送られ、落伍者はソ連兵に銃でたたかれ可哀相な一面も見ました。

厳寒にはいり栄養失調者がだんだん増え道端に餓死した日本人、虫の息で倒れている者、悲惨な日々、また兵隊さんも出航までの間毎日三人五人と死んでタンカで運び、死体からは衣類は取られ、フンドシ一枚の裸にされて埋められた。

夜は外出禁止、夜中は戦車の音がごうごうと鳴り響き、眠られぬ日九か月間も生きた心地ではありません。お金のない人は売女も出て来て深刻な状態でした。